

平成 22 年 6 月 2 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520652

研究課題名（和文）

殖産興業としての再興九谷焼の資料化と消費遺跡からみる九谷焼の流通

研究課題名（英文） Revival KUTANI WARE-data base of production and consumption

研究代表者

佐々木 花江 (SASAKI HANA E)

金沢大学・環境保全センター・准教授

研究者番号：40303276

研究成果の概要（和文）：再興九谷焼の生産や流通の状況は十分に研究されていなかった。宝町遺跡より再興九谷焼が大量出土し、消費地から生産や流通を探るべく資料化を進めた。その結果、消費遺跡出土品と文献資料、伝製品の資料や窯跡出土品を比較検討し、春日山窯や若杉窯、吉田屋窯の生産の状況を復元することができるようになった。

他方、半壊状況の窯の調査をおこない、記録保存をおこなった。遺跡の活用として、骨董的価値から窯跡や製品を見ていた地元の人々に、文化財に対する新たな接し方を示すことができたことは意義がある。

研究成果の概要（英文）：The antique Revival Kutani Ware is favored and well known. Hence the study on its production and commerce are not well worked. By the comparative study of the collected data-base and the archaeological materials found at consumed site, such as Takaramachi site, produced wares at Kasugayama kiln, Wakasugi kiln and Yoshidaya kiln became more familiar.

It was also successful that people became aware to the idea of historical property by the archaeological excavation of Nashitanikoyama kiln which has abandoned and only attracted for the robbing,

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：再興九谷焼、梨谷小山窯、宝町遺跡、北前船、明治時代、陶磁器

1. 研究開始当初の背景

考古学で、江戸時代以降を研究対象とする事が一般的になったのは 1970 年代後半であ

る。しかし、行政緊急発掘ではいまだに明治時代以降の調査資料は限られ、資料は非常に少ない。

研究代表者は金沢大学内の宝町遺跡発掘調査で、江戸時代から明治時代末年までの加賀藩士族町における生活の様子を示す多数の陶磁器を得た。肥前や瀬戸の陶磁器が江戸時代以降全国的に流通したことが知られているが、宝町遺跡からは多種・多様の再興九谷焼が出土することが特徴であることに注目した。

江戸時代以降の江戸は各地の陶磁器が集中するが、再興九谷焼は加賀藩邸で数点出土した以外知られていない。石川県内でさえも出土報告例に限られ、考古学的資料としては少ない。美術的価値の高い再興九谷焼の伝世品は多数あるが、その作者や窯は日常生活品として出土する製品と関連づけられてはいない。それぞれの生産や流通の実態を調べる必要のあることを感じた。

明治時代以降は新しい時代であるというものの、世代が変わりモノや情報を伝えることが難しくなっている。また、新しいという誤解がゆえに、品物が破棄されたり情報が無視されたりする。時間的にも、再興九谷焼の生産と流通の実態をより明らかにすることは急務であると考えた。

2. 研究の目的

第一の目的は、伝統産業九谷焼の実態を明らかにすることである。考古学的にいくつかの再興九谷焼の窯跡が調査されている。発掘調査され製品が明らかになった窯でも、消費地での出土状況はまだ把握できていない。また、伝製品は多く残っているが、日常生活品として出土する品との関連は研究されていない。加賀藩では江戸中期に磁器生産が始められ、幕末に九谷焼が再興されて以来今日まで窯業が続いている。九谷焼は伝統産業として世に認められているが、実際にはまだその歴史や実態がわかっていない。このため多くの資料を広く収集し、デジタル資料化する。

第二の目的は、再興九谷焼の流通の実態を調べることである。肥前の陶磁器は海上運送により、九州から北海道まで運ばれた。加賀には北前船交易で肥前の陶磁器が運ばれ、同様に九谷焼も商品として北前船に乗せられたという記録が残っている。しかしながら、具体的にどのような製品が運ばれたのかはわかっていない。伝世品として、出土品として、再興九谷焼の製品が日本海の港を通じていつ運ばれ誰に使われたのかを知ることは、再興九谷焼から商圈が明らかになることである。

第三の目的は、現存する未調査の再興九谷

の窯跡から、文化財として保存活用するための資料を得ることである。記録としてのみ窯の名が残っていたり、製品のみが残存するものの窯跡が知られていなかったりする場合は多い。いくつかの候補の中から、春日山窯と梨谷小山窯跡に着目した。

第四の目的として、輸出された製品の資料化がある。再興九谷焼は国内に残る作品よりも外国に收藏される作品のほうが多い。しかしながらその作品は系統的に調査されていない。九谷焼が外国で好まれ輸出用の製品が大量に生産されたことは知られているが、国内にはその輸出用製品がほとんど残っておらず、輸出の実態がわからない状況である。万国博覧会に出品された作品でさえ、作品自体の詳細やその行方がわからないものが少なくない。この輸出用九谷焼や海外に運ばれた製品の資料化は、国内とは全く異なる再興九谷焼生産の一面を明らかにするものである。

3. 研究の方法

分散されている資料をなるべく多く集め、考古学の方法で資料化することをおこなった。具体的には、再興九谷焼製品の写真撮影をおこない、デジタルデータで分類・整理している。

第一の目的の九谷焼の実態を探るために、博物館や資料館の作品の写真データを収集した。博物館や資料館で陶磁器を専門とする所は限られており、さらに九谷焼の所蔵品は非常に少ない。博物館カタログや出版物の写真も資料として利用する。石川県立九谷焼美術館では、松山窯の伝世品を数多く撮影する機会を得た。この松山窯は、30年ほど前に研究分担者が中心となって発掘調査をおこない調査資料があることから、窯跡出土の考古学的資料と松山窯とされる伝世品との比較が可能である。

また、金沢大学資料館に保管されている九谷焼見本や暁鳥コレクションの中の九谷焼製品も写真撮影をおこない、デジタルデータとした。

陶磁史上、有田や波佐見といった肥前窯業の他地に与える影響は大きい。技術的・装飾的な流行や進歩は時代をものがたり、肥前陶磁器と九谷焼との比較検討でも、未知の部分が多い九谷焼の参考になった。

第二の目的とした流通の実態は、軺、舞鶴、敦賀、橋立、小木、新潟、酒田、札幌などの北前船の寄港地をめぐり、旧家所蔵品のうちの陶磁器の撮影をおこなった。庄屋や大商人などの家が資料館として公開されている場合が多く、装飾的美術品ばかりか日常品として使われていた九谷焼の状況も見ることがで

きた。

第三の目的の窯跡の調査は、梨谷小山窯で短期の発掘調査をおこない、窯体の写真撮影と測量作業をおこなった。採集した遺物についても写真撮影、実測図作成をおこない考古学的報告資料とした。春日山窯については、宝町出土品と伝世品の筆遣いによる類似を検討し、比較同定をおこなった。

第四の目的とした輸出品の資料化については、外国の博物館や美術館のコレクションにある再興九谷焼のデータ化を考えた。国外では日本陶磁器のコレクションは限られており、さらに再興九谷焼となると世界の中でも数はいっそう限定される。館蔵品のカタログも用いてデジタル化をした。

4. 研究成果

再興九谷焼は加賀藩の殖産興業として進められたが、藩の事情によりすぐに民間に引き渡されることとなった。強力な統制がなかったために、短期間しか操業できなかった窯が多く、窯の名前のみ知られているが窯の場所や製品がわからないという例が少なくない。京都などから呼ばれた職人は転々と窯場を移り歩くということになり、再興九谷焼の産業として不安定な現実がみえる。宝町遺跡という消費地から再興九谷焼を考えるにあたり解明されていない事実が多いことがわかり、再興九谷焼の製品や窯のデータ化による記録保存は急務であることを再認識することとなった。そこで研究代表者は、石川県志賀町梨谷にある梨谷小山窯の発掘調査をおこなった。この窯は私有地内にあり、窯体の中央に杉の樹が生えて蔓や灌木で遺構は崩れるままで、所有者も窯のあることさえ知らないほどであった。樹木の伐採とかぶった表土の除去により窯体を明らかにし、窯体と周辺地形の実測図と写真撮影による窯跡の現状記録を作成した。盗掘によるものが採集した遺物は少量であったが、洗浄、分類・接合、写真撮影、実測図の作成を終了した。ごくわずかではあるが伝世品が知られており、窯跡出土品とは全く異なる製品であった。地元の人たちに伝え聞いていた遺跡が現地であることを知らせ、遺跡の扱いの方法について話ができただけは、以後の遺跡の活用に役に立ったと思われる。今後、よりよい遺跡保存の方策について志賀町や所有者と協議していく予定である。

国内の博物館・美術館や資料館収蔵品のデータ化は、収集した撮影写真と情報の整理を1点ずつすすめている。金沢大学宝町遺跡出土品も報告書作成に向けて整理をすすめており、「再興九谷焼・春日山窯の製品について—金沢大学宝町遺跡出土品と暁烏コレ

クションから—」（『金沢大学文化財学研究10』2010,PP.25—29）で春日窯製品について検討したように、考古学的資料と伝世品との比較で窯の同定ができるもののあることは明らかになっている。このように特定された資料の増えるに従い、同じ窯で作られた作品の種類や陶工の数、作風、年代による製品の違いが見え、文献資料ではわからなかった再興九谷焼の窯の歴史が明らかになってくる。宝町遺跡の結果から加賀藩内の発掘資料も検討すると、春日山窯製品がいくつか見つかった。春日山窯と同様に、他の再興九谷焼のよく知られている窯の様子や、藩内では好まれて流通していた製品もわかってくるのが大いに期待できる。吉田屋窯、若杉窯、松山窯などはかなりの製品が特定されることが期待され、検討資料である宝町遺跡出土品のデータ化を急いでいる。

日本海岸の古い港町の調査からは、再興九谷焼初期の製品は見当たらず、明治時代末からの製品が入っていることがわかった。宝町遺跡や加賀藩内で出土するような再興九谷焼初期の製品は、遠隔地まで運ばれることがなかったのではないかと推察される。かたやこれらの地で使用されていた陶磁器の大半は全時期を通じて肥前製品で、肥前地方が現在に至るまで重要な生産地であることを証明している。

肥前製品に比べ再興九谷焼は上絵製品が多いことが特徴的で、この上絵は再興九谷焼の窯として知られているところで生産されたばかりではなく、金沢市中の民家の玄関先でも上絵窯が設置されて製作されていた。明治以降に輸出が盛んになると、横浜や神戸へ職人をおくり「九谷」の名前を記して輸出した。さらに、海外で薩摩焼が好まれることがわかると、九谷焼の職人は薩摩焼を模して製作し「薩摩」の裏印で輸出したという。新しい時代の、技術が時代を語らない現実は、考古学的にも混乱の時代となることを示している。

外国にもたらされた再興九谷焼の資料は、本研究以前からも陶磁器交易研究の一環としてすでに集めたものがある。ロンドン、ワシントン、コルフ島、ゴアとマイソールなどでの再興九谷焼の情報があつまっているが、このうち生産と同時期にもたらされた例はロンドンの大英博物館、ビクトリア&アルバート美術館収蔵品に限られるようだ。これらも万国博覧会の出品購入品で、特別な状況下でもたらされた品である。他地でのコレクションは土産品や骨董品、美術品として後に購入したもので、再興九谷焼窯の独自の商圈や交易を示すものではない。しかしながら国内に残っている再興九谷焼にはない種類の焼き物を含み、その技術と種類の多様さを見ることができる。

シーボルトコレクションやモースコレクションは、集められたり持ち込まれたりした年代のはっきりしたコレクションであり、日本国内ではすでにわからなくなってしまうている編年の助けになる有用な資料である。現在のところ現地でまだ十分に陶磁器の整理が進んでおらず、研究期間中の資料化の計画には双方に無理があることがわかり、今後の独自の調査で資料化をおこなうことにした。

再興九谷焼は窯跡も製品も知られているものでさえ、実際の研究自体が進んでいないことに加え個人所有の多い資料の収集は難しく、その類例がわからずにいた。考古学的発掘により得られた宝町遺跡出土の大量な再興九谷製品は、消費地から生産地の状況を逆にたどることができ、研究上の問題点がどこにあるのかをより明らかにすることができる資料である。本研究で得られた再興九谷焼の整理されたデータは、生産地側からの研究や美術品としての従来の研究に加えて、新たに研究の空隙を埋めることのできる重要で大量な情報である。外国のコレクションも国内の蔵品も、存在を知っているものの研究期間内にデータ化できなかった分については今後も追加して、最終的にはデータ自体の有効活用ができる場を探りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. 佐々木花江 「再興九谷焼・春日山窯の製品について—金沢大学宝町遺跡出土品と暁烏コレクションから—」『金沢大学文化財学研究 10』2010, 25-29, 査読有

[その他]

1. 佐々木花江 「海底から引き揚げられた陶磁器と金沢の城下町発掘品」, 金沢大学公開講座『日本海の海上交通史と水中考古学』, 2010年1月30日, 西町サテライト・プラザ (金沢)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 花江 (SASAKI HANAE)
金沢大学・環境保全センター・准教授
研究者番号 : 40303276

(2) 研究分担者

佐々木 達夫 (SASAKI TATSUO)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号 : 60111754